

## 高等教育の国際化には何が必要か

### 国際教育交流部門での

### 留学生の積極的活用

— ニューヨーク州立大学バッファロー校の場合 —

一橋大学  
商学研究科専任講師  
留学生専門教官

太田 浩

本稿では、大学の国際教育交流部門における留学生の積極的活用について、私が留学したニューヨーク州立大学バッファロー校（以下、SUNY-Bufferaloという）の事例を挙げながら、私見を交えてその効用を論じてみたい。

SUNY-Bufferaloは、ニューヨーク州立大学機構六四校の中で最大規模（学生総数：約二万六〇〇〇）を誇り、かつ最も広範囲な学問領域をカバーする（三〇〇種類を越す学位プログラムを提供）研究型大学である。留学生数は、一九九六年には全学生数の六・八％であったのが、二〇〇一年には一二％、約三二〇〇名と急速な伸びを示している。アメリカの他の研究型大学と同様に、留学生はEngineering（工学）、Business Management（経営学）、Computer and Information Sciences（情報工学）に集中しており、この三領域だけで、留学生総数の半数を占める（約一六〇〇名）。留学生の出身国は、多いほうから、インド、中国、韓国、台湾、日本で、この上位五か国が全体

の六五％を占める。教職員総数は、約一万四

〇〇〇（日本の同規模大学に比べれば格段に多い）であるが、驚くことに、その四割（約五六〇〇）はアシスタントと称する学生が教職員を兼務しているものである。アシスタントには、大別して四種類ある。まず、大学院

生によるものが三種あり、職員として仕事をするグラデュエートアシスタント（GA）、教員として授業を任されるか、専任教員の授業の補助をするティーチングアシスタント（TA）、教員の研究活動をサポートするリサーチアシスタント（RA）である。このうち、TAとRAは、原則として博士課程の学生であることが条件となっている。そして、残りの一種が学部生によるもので、図書館、学食、コンピュータ室等で主にルーティンの仕事を

され、労働組合、健康保険にも加入する。SAは、いわゆる学内アルバイトの扱いで、時間給（時給五・一五ドルから始まり、徐々に昇給する）が支給される。もちろん、留学生もアシスタントになれるがGA、TA、RAになるためには、大学の付属英語学校（English Language Institute：ELI）が行う英会話の試験に合格しなければならない。TAの合格点は、授業に携わるという観点から、GA、RAよりも高く設定されている。

一般的にアメリカの大学は、学生（特に大学院生）を「有用な人材」とみなし、積極的に大学の教育、研究、Administration（事務）の現場で活用し、それが教育研究活動の多様化や活性化、そしてAdministrationの効率化、迅速化に寄与するという認識をもっている。また、学生の活用がうまく機能するか否かは、その大学の教育と研究の質の高さに反映すると考えられている。学生の側もアシスタントとして働くことにより、経済的援助を受けられるだけでなく、その経験をキャリアアップメントの一環としてとらえている。私は、日本の大学での国際交流関係業務の経験と将来にわたって、この分野でキャリアを積み重ねたいという志を買われ、国際教育部でGAとして採用された。主として、日本からの来賓、交換プログラムでの来訪者に対する通訳

と各種印刷物の翻訳、そして留学生の募集、入学に関する業務に従事した。それらの経験をとおして、アメリカの大学の国際教育交流事業における実務、地道な裏方の仕事、新規交流プログラム立ち上げまでのプロセス（打々発止の交渉、意思決定の舞台裏）、学長・副学長のリーダーシップなどを実地に学ぶことができ、それは私が授業や論文作成で学問として学んだことに匹敵する価値があると言える。

SUNY-Buffaloの国際教育部 (Office of International Education) は、日本の大学風に置き換えて説明すれば（アメリカの大学の事務組織は日本のそれとはかなり違うため、単に和訳しただけでは理解しにくい面が多い）国際交流担当副学長が直接指揮を執る「国際交流事業統括（局）」のもと、「留学生募集課」「留学生入学課」「留学生・外国人研究員（受入れ）課」「海外留学・語学研修（派遣）課」「付属英語学校」「フルブライト事業課」で構成されている。三三〇〇余名の留学生、六六〇余名の外国人研究員・客員教授、六〇近くの海外協定校との各種交流プログラム、昼夜開講で留学生だけでなく移民の英語教育も担う付属英語学校、多くのフルブライト関連事業などを考慮すれば、専任スタッフ二五名（英語学校の教員を除く）というのは、決して

多い数ではない。しかし、それでも円滑に事業を運営できる裏には、GAの存在がある。国際教育部は、その業務の特性から留学生（特にアジア系の留学生）をアシスタントとして、多く採用している。アジア系が好まれる理由は、勤勉であるという定評とSUNY-Buffaloにおける高いアジア系留学生およびその志願者の比率が背景にある。

海外向けの広報と実際のリクルーティング活動を担う留学生募集課、そして留学生の学部課程入学審査と大学院を含めた入学に関する手続きと在留資格認定を処理する留学生入学課には連日、世界各地から多くの問い合わせがくる。インターネット電話の普及で海外から気軽に電話してくる志願者も増大している。そんなとき、込み入った件は、留学生アシスタントが母国語で即座に対応する。Eメールでの質問にも、母国語で留学生アシスタントが自分の経験も踏まえて回答すれば、志願者の大学に対する印象は格段によくなる。付属英語学校や留学生・外国人研究員課で起こった問題で、母国語での説明が必要な場合や文化的、社会制度的な違いから同国出身者の援助が求められる場合には、課を超えて留学生アシスタントが対応する。海外留学・語学研修（派遣）課が、学生の派遣先で事故が起きた際に現地の情報収集をする場合も同様

である。アシスタントは自分の所属している課だけでなく、国際教育部全体で貴重な人材として、フレキシブルに活用される。

昨今のIT時代において、留学生募集におけるウェブ・サイトでの情報提供は、さらに重要なものとなっている。アメリカの各大学は、ウェブ・サイトでさまざまな趣向を凝らし、魅力的なサイトからの確な情報を提供し、留学生予備軍を引きつけようと躍起になっている。今や入学願書の一次申請は、サイトの「Apply Online」をクリックして、「インターネットから」が常識である。ITとともに育った若者の感覚にマッチするウェブ・サイトは、同世代の学生がアイデアを出し、最新のテクニックを駆使して作るに限る。また、大量のデータ（世界各国の高校、留学フェアのブースに訪れた学生、志願者、合格者、入学手続者）を段階的に効率よく処理するうえにおいても、ITの活用は欠かせない。SUNY-Buffaloの留学生入学課には、昨年、学部、大学院合わせて約三三〇〇通の願書が届いた。しかし、ウェブ・サイトや入学業務にかかわるソフトの作成をアウト・ソーシングし、情報処理業者に高額なコミッションを払うことはしない。コンピュータ・サイエンスを学ぶ留学生（大学院レベルでは七〇%を占める）がGAとして採用され、それに従事し

## 高等教育の国際化には何が必要か

ている。現場では、彼らがある意味、国際教育部の職員と大学全体のコンピュータ（情報）センターの職員の間に入り、国際教育部サイドから出たIT活用のアイデアを、大学全体のITシステム担当者と技術的な整合性を図りながら、一つひとつ形にしていくな。サイトのメンテナンス、情報の更新等もアシスタントが日々こなしていく。ITを学ぶ留学生にとっても、やりがいのある仕事である。

SUNY-Buffaloの留学生募集課および留学生入学課では、入学審査に合格し、合格通知を送付した合格者のプールから実際に入学する者の比率を高めるために、今年から合格者とその両親へのより積極的なアプローチを始めた。これをInternational Admission Ambassador Programと呼んでいる。そこでは、アシスタントだけでなく、留学生のボランティアも活用することになった。プログラムに応募した留学生ボランティアは国ごとに編成され、そこにリーダーとして同国出身の留学生アシスタントが入る。

まず、留学生アシスタントが中心となり、合格通知書に同封する「両親宛の手紙」を母国語に翻訳する。大学の実績を訴え、Buffaloという町の良さを紹介し、合格者のみならず、その家族ともども、大学のコミュニティに迎える温かさをしたためる。しかし、その手紙

の基調、情報量は言語にかかわらず、英文の原訳とほぼ同じであるが、表現方法は各言語によって、微妙に異なる。それは、国によって、大学に対する文化的な背景が異なり、言い回しを変えたり、間接的な表現にしたりする必要があるからである。例えば、アメリカ独特の大胆な宣伝文句の羅列や州立大学であるがゆえの授業料の割安感を強調することは、東アジア諸国では、貧相な大学との印象を与え、逆効果となかなかねない。むしろ、控えめなトーンの記事のほうが、大学の格と重みを伝えることになる。さらに、マレイシアのような多民族国家の場合、合格者に対しては、民族の違いによって、同封する手紙の言語が異なるため、必ず送付前に同国出身が確認しなければならない。

次に、合格通知書が届いたところを見計らって、留学生ボランティアが出身国の合格者に「フォロアップ」の電話をする。この電話には、「合格した大学の中から、ぜひSUNY-Buffaloを選んでほしい」というメッセージを合格者に対し、キャンパスからリアルタイムで送るという意図がある。情報過多のIT時代であっても、やはり実際に留学している同じ国の学生からの生の情報、体験談の説得力は大きい。合格者にとって、大学のウェブ・サイトから得た情報と合格通知だけでは、お

ぼろげな「私の留学」の像がより現実的なものになってくる。言い換えると、合格者の自宅からSUNY-Buffaloへの留学という、より具体的かつパーソナルな道筋をつけるためには、この時点からSUNY-Buffaloに来たとき、最初に頼りになる出身国留学生のコミュニティに取り込むことが最も効果的と言える。合格者が自分の国の先輩学生から歓迎のメッセージを電話で受け取り、その後Eメールで口コミの情報と交換していくという「留学前サポート・システム」は、合格者の留学に伴う不安感を和らげるだけでなく、留学前から友達を得た感覚、大学に対する親近感、信頼感を与える。加えてSUNY-Buffaloに留学するに備える。具体的な心構え、準備をも促すことになる。

留学生ボランティアからの電話の効用で、もう一つ見逃せないことは、合格者の両親と話す機会があるということである。ただし、学部課程の若い学生は、合格者の家族（両親）が電話を取ったとき、SUNY-Buffaloの看板を背負って話をするという状況でのマナーを身につけているものは少ない。礼節を重んじる東アジアでは、せっかくの国際電話が礼儀を逸した言葉遣いのため、むしろひんしゆくを買ってしまうおそれがある。そこで、実際に電話をする前に、留学生アシスタントが比較

## case study

的年齢の高い、あるいは職業経験のあるボランティアと共同でマニュアルを作り、それに基づき電話のかけ方のトレーニングをする。留学生ボランティアが母国の礼儀を踏まえ、きちんと応対することにより、合格者の両親に好印象を与えることとなり、両親の同意が決め手となって、合格者がSUNY-Buffaloへの入学を決意することは決して少なくないと思われる。

この種のプログラムを実施するにあたって、根本的なこととして認識されなければならないことは、大学が留学生に高い満足度を与えているかということである。在学している留学生から合格者に対して、大学がある程度コントロールしながらとはいえ、生の情報を流すということは、彼らの満足度が低ければ、悪評を世界中にばらまくことになってしまふ。多忙な留学生がわざわざ時間を割いて、母国の留学を目指す人たちに自分の大学を薦めてくれるか、質問に丁寧に答えてくれるか、継続してEメールを交換してくれるか、在学生の満足度を示す一つの指標になると言える。

以上のとおり、SUNY - Buffaloが国際教育交流部門で留学生を積極的に活用している事例を紹介したわけであるが、IT分野を含め、アシスタントを雇用するときに忘れてはならないのが、守秘義務等、就業にかかわる倫理

事項をきちんと遵守させる仕組みである。雇用契約時にその旨サインさせることは当然のこととして、それ以上に大事なことは、逆説的な言い方かもしれないが、アシスタントを



SUNY-Buffaloキャンパスの様子

単にアルバイト的な扱い（補助業務の切り売り）に終わらせず、能力があれば積極的に重要な仕事を任せることである。そして、アシスタントには、任せた仕事に伴う責任を自覚させるとともに、うまく成し遂げられた際には達成感を与えたいという雇用者（大学）側の姿勢が不可欠である。私はアシスタントとして働いているときに、入学業務にかかわる全学レベルの担当者会議等に上司とともに何度か出席した。そこでは、アシスタントも正職員と分け隔てされることなく意見を求められ、よいアイデアは採用された。自分の仕事が大学づくりに貢献している実感は、留学生という立場からするとなにごとも換えがたい充実感がある。同時にアメリカの大学の度量の大きさを再認識することとなった。果たして、今日の日本でどれだけの大学が学生を信頼し、真剣に日々の大学づくりに参画させているだろうか。学生のための（Student-Centered）大学づくりとは、学生にアンケートを取って、その要望を取り入れるという小手先の手法ではなく、本来こういうところから始められるべきである。日本と同様に、否それ以上の学園紛争を経験したアメリカの大学は、学生を信頼し、教職員と同等のパートナーとして大学づくりに参画させている。